

儒教社会と母性

— 『後漢書』列女伝の研究（Ⅱ） —

下見 隆雄

6. 妻の母性の構造、貞節を通しての検証——⑫「劉長卿妻」・⑬「皇甫規妻」・⑭「陰瑜妻」を中心に——

（i）貞節への視点

儒教社会を構築する諸理念は、概ね母性の威力を中核としてその多様な意義を発揮すると思われる。その母性の威力は、先ず、母の慈愛保護、妻の女卑従順を通して子や夫を支援して、かれ等を孝義の実践に誘導する点において、明確にその姿を現している。ところで、儒教社会において、妻の母性が家族制構築に果たす役割は特に重要であり、従ってその構造も複雑である。この故に、この社会における母性の本質や意義を究明するには、妻の母性の構造的特質を具体的に解明しておく必要が有るであろう。ごく単純には、妻の母性は、女卑従順に子への慈愛保護の要素を混じていると思われるが、その具体的性格はかなり多岐複雑である。いままで、儒教社会における母性の意義を検討して、主として、母の母性とその発展的な性格を持つ妻の母性について、その意義や役割を巡ってその類似面に視点を置いて考察を加えてきた。しかし、子と夫とは自ずから別の存在であり、その母性は本質的には同様の意義を具えると思えるが、実際面においてはその発揮のかたちを異にする点の多いこというまでもない。特に、妻の貞節において、子に対すとは異質の母性表現が認められ、かつこの社会における妻の母性の重要性が確認されるのである。

母性実践が、夫に対して愛の忠誠として表現されたものが貞節である。古来、この貞節の姿は、様々に掲げて羅列紹介されて称賛され続け、また、近世においては、その女性にのみ犠牲を強いる非人間的な考え方が批判される傾向に在ったが、その本質的性格や意義を根本的に分析究明する試みはいまだかつてなされず、ましてや、妻の母性行為という観点からこれを考察した研究がなされたこともない。貞節の実際は、後述の如く、家族制理念を背景に、女卑従順を旨として夫へのみの愛の忠誠を實踐するということを通して、家からの夫の離脱を抑止し、夫に孝義の實踐を促すものである。いままで論述してきた母や妻の母性の役割から分かる通り、貞節が、妻の母性実践の一形態であり、儒教社会独自の夫婦の対応概念を通して実践されること明らかである。そしてまた、この貞節が、自己犠牲的性格を持つことも、否めない事実である。

この社会独特の自己犠牲的な姿を通して実践される貞節を、これが特に女性に一方的に求められる点に注目し、その背景について考察を加え、これを通して示される妻の母性の特質と儒教社会における妻の母性の存在意義について論述する。

貞節について語るものは、この『後漢書』列女伝では、⑥「楽羊子妻」の他に、⑨「許升妻」・⑫「劉長卿妻」・⑬「皇甫規妻」・⑭「陰瑜妻」等が有る。ただし、⑨「許升妻」は特に復讐に関連して他で取り扱う。先ず、諸伝を一括して掲げて、伝記の性格や主人公の貞節のかたちを検討し、次いで、儒教社会における貞節を巡っての諸問題を論述していく。

(ii) 各伝における貞節のかたち

(イ) ⑬「皇甫規妻」——貞操堅持——

安定の皇甫規妻は、何氏の出の人か分からない。規は妻に先立たれ、後添いとして娶ったのである。この妻は、文

章を作るのに優れ、草書が上手であった。時には規に代わって返事を認めることもあった。人々はその上手さに感心した。規が死んだとき、妻は若さ衰えず、容色も美しかった。その後、董卓が相国になって、その評判を耳にし、荷物ぎっしりの輓馬車百台、馬二十四、奴婢や錢・絹など道をおおい、尽くす程の支度を整えて招き寄せようとする。妻は、そこで輕装で卓の門にやって来て、跪いて哀しみを込めて自分の気持ちを陳べる。卓は、身分低い手下の者どもを使って、一斉に刀を抜き放って取り囲ませ、いう、「わしの威力は四海を総て靡かせる程だ。どうして女一人に通用しないことがあるのか」と。妻は免れ得ぬと知ると、立ち上がって卓を罵って、「あなたは羌族の出身のくせに、天下を荒し回っておいて、まだ足りないのか。わたしの先祖は世々に清い徳で知られ、皇甫氏は文武に優れた漢の名臣です。あなたの親は使い走りの小者ではないか。それでも主君の夫人に非礼を加えようとするのか」と。卓はそこで車を庭に引き入れて、彼女の頭を輓に懸け繋ぎ、笞叩き棒叩きを繰り返した。妻は、叩く者にいう、「なぜもつと酷くしないのか。早く死なせて貰いたい」と。そのまま車の処で死んだ。後の人が絵に描き礼宗と号したという。

この伝は、貞節について、夫以外の男性を拒絶して、身命掛けて貞操を堅持する面で教示する。この精神が再婚拒否をも派生するのである。

皇甫規の伝は、列伝五五に見える。唐の張懷瓘撰『書断』に、「扶風の馬夫人、大司農皇甫規の夫人なり」「才学有り。隸書に工みにして諸妙品に列す」等とある。

夫に相應しい妻の教養が、夫の社会活動を効果的に支援している。男性に匹敵或いはこれを越える女性の学問的教養が注目され、家庭における母性への期待がこの方面においても顕著になるのは、門閥貴族勢力が盛況を呈する賢管時代であり、『晋書』列女伝や『世説新語』賢媛篇などには、女性がその学問的見識や教養を前提とする賢識の面で称賛されている事例は多い。『後漢書』列女伝でも、⑤「曹世叔妻」は、歴史に冠たる女性学者であるし、⑩「袁隗妻」・⑭「陰瑜妻」・⑰「董祀妻等」、又、列伝二四梁竦伝の梁嫔や列伝五三李固伝の李姬等も、教養の面での才識

に見るべきものがある。これらの時代、地方勢族における経済的な個性的発展が、各々の勢族の家庭の子女に、教育を施し、その家に相応しい学問的見識を培う余裕や意識を醸成していったものと思われる。家を維持する母性への期待に新しい展開が訪れていたのである。『華陽国志』にも、教養豊かな女性は多く、特に、漢中郡の杜泰姬・陳惠謙や梓潼郡の季姜等はその豊かな教養が顕著である。

この婦人は、身を掛けて、暴力に対して貞操を堅守している。⑥「楽羊子妻」・⑨「許升妻」の場合に類似する。このような貞節が、儒教社会構築の理念と密接に組み合わせられ称賛される故に、貞節から外れざるを得ない人生を体験した⑩「董祀妻」が同じく列女伝に列せられることに批判的な指摘がなされることになるのである。

(ロ) ⑫「劉長卿妻」——再婚拒否——

沛の劉長卿妻は、同郡桓鸞の娘である。鸞は既に列伝に見える。男子一人を生んで、この子が五歳の時、長卿は死んだ。妻は、再婚をしないと疑われることを避けて、生家に帰らなかつた。子は十五歳になった年の暮れに夭折した。妻は再婚を断れないだろうと考慮して、耳を切り落として不再婚の意志表示とした。本家の女たちは哀れがり、揃って言う、「あなたの実家では、特にこうするという気持ちは無いのですよ。もし有ったとしても姉や妹を頼って自分の気持ちを伝えたらよいものを、義理にひかれて身の大切さを考えないこと甚だしいね」と。妻はいう、「昔、わたしの先祖の五更さまは、学んで儒教の宗家となられ、帝王の師匠として尊ばれました。五更さま以来、歴代変わらず、我が家は、男は忠孝で知られ、女は貞順で称えられました。『詩経』にも、「爾が祖を忝かしむるなかれ。その徳をのべ修めよ」といっています。だからすすんで体を不具にしておいて、自分の意志を明確にしたのです」と。沛の相の王吉が、この高行を上奏し、その村の門に顕賞し、「行義の桓釐」と号された。県や村で祭りがあると必ず膳を頂いた。

この伝は、再婚拒否貫徹についてのもっとも典型的な要素を持つ。

『御覽』卷四四〇引の皇甫謐『列女伝』には、「少くして桓宗に名有り。劉氏に嫁ぎて一男字は玉を生む。玉、五歳にして長卿卒す。嫁に誘はるるを懼れて、既に兄弟に帰寧せず。時任にして漸を防ぎ疑に遠ざかり、言、外に及ばず。玉、年十五にして死す。其の弟喪に会するに、刀を援きて耳を割きて、已に式せざるを明らかにす。喪側に在る者、感傷せざるは無し。宗婦、之に謂ひて曰く、家、未だ相嫁するの計有らず。若し其れ有れば、徐に姉妹に因りて以て意を諭す可し。何ぞ義を貴びて身を軽んずるの甚だしきやと。答えて曰く、昔、我が君五更、学は儒宗為り、尊は帝師為り。歴世替らず忠孝を以て顕はれ、女は貞順を以て称せらる。是を以て諸姑を忝かしむるを懼る。或いは以へらく、我が年未だ衰へず、又た、子を喪ひて卒かに迫らるるの間、能く防ぐ所に非ず。豈に其の意を豫見せざる可けんやと。郡、その閭に表して、号して景行義桓と曰ふ」と。子の名を示し、まとめ方に幾分か異動が認められる。

この伝の話の性格は、劉向『列女伝』貞順篇の「梁寡高行」に酷似する。高行は、年若くして寡となり、容貌・人柄ともに美しく、梁の貴人たちの再婚を希望する者が多いが断り続ける。やがて梁王が聞き知るところとなり、聘娶しようとする。高行は、夫への貞節を誓った身であること、遺子を守護成長させねばならないと表明し、己の鼻を切りおとして拒否の意志表示とする。後漢時代の武梁氏石室画像にもこの伝記を描き刻している。後漢時代において、家の母性たる妻の貞節への期待を表す恰好の話だったのであろう。劉長卿妻は耳を切り落としている。高行が恵まれた容貌を損なうといわば自虐的悲劇的姿勢であるのに比べると、劉長卿妻の場合は、悲劇的で無くはないが、むしろ聞き入れぬことを示す積極的で自信に満ちた拒絶姿勢であるともいえる。桓鸞（列伝二七）の娘であること、先祖の桓榮（列伝二七）以来の権榮の名族であることへの自負を精神的背景とするからであろう。なお、異質の要素も注目される。すなわち、高行が寡婦を貫く決心には、遺子を守護成長させねばならないというもう一つの理由が語られるが、この劉長卿妻の場合は、遺子は一五歳で死んでおり、寡婦貫徹の決意を支えるのは貞節のみである点はやや異なる。「梁寡高行」によっても示される如く、寡婦貫徹や再婚拒否には、貞操を堅持する貞節の面と夫亡き後にも

貞節を貫き更に家を守護維持するといふもう一つの面との両面が含まれていることになるのである。ところで、再婚拒否賞賛とは裏腹に、現実には、再婚や改嫁の例は多かつたことについては、『女誠』専心の解説で紹介している。また、このような話が存在すること自体、すでに、現実の社会諸状況の下、再婚や改嫁はむしろ多かつたことを物語るものである。なお、『潜夫論』断訟篇に、貞潔の寡婦が、周囲からの配慮のない無理強いをされ、意志を無視された婦人が自殺に追い込まれることの問題を掲げて論じ、「貞潔の寡婦、……一譙の礼を守り同穴の義を成さんと欲す。節を執りて堅固、懐を斉しみて必死。終に更に許すの慮無し。不仁の世叔、無義の兄弟に遭値ひて、或いは其の娖幣を利とし、或いは其の財賄を貪り、或いは其の兒子に私して、則ち彊ひて中して欺き嫁し、処して迫脅して遣送す。人、房中に自ら縊し車上に薬を飲み、絶命して軀を喪し、童孩を孤捐す。此猶ほ人を迫脅して自殺せ令めるごときなり云々」という。厳しい現実問題の存在したことを想像させる。

(ハ) ⑭「陰瑜妻」——再婚拒否自殺——

南陽の陰瑜の妻は、潁川の荀爽の娘で、名は采、字は女荀。聡敏で才あり技芸に長けていた。十七才で陰氏に嫁ぎ、十九才で一女を産み、そして陰瑜は死んだ。采はその時まで若さ充分であり、いつも実家から再婚を迫られるのが気掛かりで、構えて気持ちを引き締めていた。その後同郡の郭突が妻を亡くし、父荀爽は、この人に采を嫁に遣ると約束し、自分の病気が重いと詐って娘を呼び返した。采は逃れる術は無いと諦めて帰って来たが、懐中刀をしっかりと握りしめて決心を翻そうとはしない。荀爽はおつきの婢にその刀を奪い執らせて、抱きかかえて車に載せた。それでも気持ちが激してなにをするかと気掛かりで、監視は甚だ厳しい。娘は郭氏家に到着してしまふと、偽って嬉しそうな様子をして見せ、左右お付きの者にいう、「私は、本来はかたく心に決めて、夫の陰氏と同じ墓穴に入るつもりでいたけれど、親の思いを拒否しきれぬまま、こうなってしまった。真情の遂げられない以上、もうどうこうする気持ちはありません」と。そこで四方に灯を建てさせ、麗々しく服装整え、郭突に意を伝えて部屋に迎え、親しく逢

って話し合う。ところが彼女はいつまでも語り掛けて止める気配もない。郭突は相手の気持ちを配慮して、ついに夫婦の契りに到らず、夜明けまで居て部屋を出た。采は、そこでお付きの者に入浴の準備をさせ、部屋に入ると戸を閉めて、だれも近づけぬようにと付き人に見張りさせる。白粉で扉に、「戸還陰（戸は陰氏のもとへ還へらん）」と認め、「陰」字を書き終わらぬままに、人が来るのに気が急ぎ、そのまま己が帯で首を吊ってしまった。お付きの者は安心してきつて気にも留めなかった。時過ぎて訝り戸を開いて見たときは、もう事切れていた。当時の人々は憐れんだ。

この伝は、再婚拒否を貞操堅持貫徹の面で語り、阻まれて自殺によって貞節を意思表示する事例である。⑫「劉長御妻」の場合の再婚拒否は、家を守り祭祀を継承維持する意義を語る事例に関連する性格を具えるが、この伝は、むしろ⑬「皇甫規妻」が貞操堅持して自殺するのに近い性格を持つ。

郭突については、李賢注に、『魏書』卷一四の郭突字伯益（郭嘉の子）を紹介するが、陳景雲（王先謙『集解』引）は、郭嘉は建安一二年（AD二〇七）に三八歳で卒しており、荀爽の歿をへだてること二〇年に近い。荀爽が生存の時、郭嘉は丁度成人する年齢であって嫁を迎える程の息子があるとは考えられない。それに荀爽は立派な人物であるし娘の気持ちを無視することなど考えられない。「突」「爽」二字にはきつと誤りが有ろうと指摘する。沈欽韓（『後漢書疏證』）は、この郭突は、郭嘉の子伯益とは別の人であろうと、『漢晋學術編年』によると、荀爽の没年はAD一九〇とする。沈氏の指摘が正しいであろう。陳氏が荀爽の人間性と陰瑜妻再婚強要は結び付かないとする指摘は感情論にすぎない。改嫁を父が指示することはこの時代特に不自然でないことは、⑨「許升妻」や『華陽国志』等にも見えるし、『漢書』や『後漢書』にも見えるところである。なお、『集解』引王補は、蔡邕の娘文姬（董祀妻）の場合と比較しつつ、陰瑜妻を自殺に追い込んだ父荀爽を、家法の理念や漢魏晋における諸荀氏の所業を交えて批判的に評論し、観点はやや偏狭であるといわざるを得ないが、儒教社会独特の人間論ではあろう。しかし、やはり陰瑜妻のこのケースは、貞節の理念との関連で再婚拒否の観点から評論すべきであろう。後述する如く、『華陽国志』をはじめ

め諸書に、この事例は多数である。なお、恵棟（『後漢書補注』）引『荀氏家伝』に「采、郭氏の室に入りて、暮れに乃ち帷帳を去りて、四灯を建て、色を斂して正座す」とある。

（五）儒教社会における貞節について

以上、『後漢書』列女伝における貞節の事例三を掲げたが、以下、他の事例も交えて、儒教社会における妻の母性実践の一形態としての貞節の理念に考察を加える。

貞節は、本来、愛情の独占欲求を根源とするのであろうが、それが露には表出されず、相手への愛情の忠誠として表現される。また、その忠誠表現には、相手の愛の離脱ないし消滅を牽制する意識も作用しているであろう。おそらく、貞節は、両性の愛の感情が理想とする理念なのであろう。しかし、古来、この精神は女性の方が堅持すべきものと規定される傾向が強く、夫以外の男性との性の関係を拒絶するかたちをとるが、その本質は、夫と定めた男性以外の性の関係を禁止する性格が強い。家族制必須の儒教社会では、この貞節は、特に、夫の死後においても持続することが要請され、寡婦を貫き、再婚を拒否するケースと密接に関連している。先ず第一に、夫の死後も断絶しない忠誠であることを前提として、貞節は意義有る理念となる。これによって、その内実である母性の、夫への現実的威力が確定するのである。再婚拒否や寡婦貫徹は、直接基本的には、『礼記』郊特性に、「啗たび之と斉すれば、終身改めず」（『白虎通』嫁娶等）とか、劉向『列女伝』貞順篇の「蔡人之妻」に、「人に適くの道、一たび之と醮すれば、終身改めず」とあるように、本来、夫に対する妻の貞節を自覚或いは要請する理念に根を發し、夫への一方的な忠誠を求める考え方を核とするものであろう。そして、特に貞節においても、またこの理念が夫の死後という状況で発現される寡婦貫徹や再婚拒否の場合においても、これを損なわないために身を殺す女性もある。死ぬことでこれに負わされた他の諸任務の遂行が途絶することの懸念よりも、婦人にとって、貞節や再婚拒絶が身に代えても全うされるべき

基本的な重要責務であることを示唆する点に意義が設定されているためであろう。同じく貞順篇の、「宋恭伯姫」・「衛寡夫人」・「黎莊夫人」・「齊孝孟姫」・「息君夫人」・「齊杞梁妻」・「楚平伯嬴」・「楚昭貞姜」・「楚白貞姫」・「衛宗二順」・「魯寡陶嬰」・「梁寡高行」・「陳寡孝婦」など、いずれも貞節を守り或いは寡婦を堅持した婦人の話である。なお、『毛詩』邶風の柏舟は、衛の世子共伯が早死し、妻共姜は、改嫁させようとする父母に、拒絶の意志を表明する詩という。ただしこれらは、単に夫に対する妻の愛の忠誠という個の夫婦における精神上の問題としてはなく、儒教社会における家族制の問題として考察されねばならない。さて、次に、寡婦貫徹や再婚拒否は、夫への生前の貞節の証の意味も含まれ、単に夫への愛の忠誠の精神の継続の如く提示されるが、一方には、夫亡き後の家の護持という実質的意義も与えられている。また、これらの考え方は、一応、その表面は女性に一方的な犠牲を求めるかたちを呈するが、しかしその根を究めると、この犠牲は家族制の擁護維持に大きな役割を果たしており、妻の犠牲は、己が威力の中心となる母性基盤の存立への奉仕でもある。そこには、母なるものたる家を守護する原存在としての母性の姿が明確に存在している。貞節における犠牲的な姿は、単に他のために空しく己を捧げる犠牲とは断定し難く、この社会における母性の威力とその影響力の貴さと深く関わり、この理念を巡って、この社会における夫婦愛の様相が明らかとなり、母と子・妻と夫の関係や家と母性の関わりの諸特質が検証できるであろう。

（iv）妻の貞節と夫の孝

先ず、夫を孝義に導く貞操堅持の貞節について考察する。儒教社会における夫婦の愛の諸相は、家族制を守護構築するための男尊女卑や女卑従順、また男性への孝実践の要請という理念のもとに統括されている。この事実を、先ず、女性の貞節が、男性の貞節とは直接対応しない点を中心に確認してみよう。劉向『列女伝』の「宋鮑女宗」（賢明）は、夫が愛人を外に持つ。兄嫁は、愛が他の人に移ったのだから去るべきだと諭すが、女宗は、女は一旦嫁した

れば夫が死んでも他に嫁せず家のために働いて舅姑を養うべきもの、それに、士たるもの妻二人までは礼のきまりと述べて去らず婦道を全うする。妻の貞節は全く一方的であり、妻への夫の貞節は求められない。原則として、この社会では、妻の貞節に直接応える夫の貞節は存在しない。夫の不孝や不忠は批判されるが、不貞を批判する理念を持たないのである。妻の貞節という誠意に対しては、夫は、家への奉仕貢献、すなわち、母なるものへの孝の実践を通して応えるものと認定されるのである。死をも掛けるべきのつびきならぬ厳しさを持つ貞節は、家族制を背景とした、夫に対する逃れ得ざる孝の実践要求としての重みを持って迫るのである。この故に、「魯秋潔婦」（節義）は、妻の貞節を裏切る夫の行為を直接詰るのではなく、親への孝の実践の不実として、死を掛けてこれを詰るのである。「周南之妻」（賢明）は、命を受けて水土を平治する夫に、ひたすら父母の在すがためと心に言い聞かせて王事に励むようにと望む。また、⑨「許升妻」の場合、妻は、博徒として操行理まらぬ夫を泣いて戒める。実家の父は怒って娘を改嫁させようとするが、娘は貞節を堅持して改嫁を拒否する。この妻の貞節の真心に感動した夫許升は立ち直って学問を修め名を成して官吏となる。夫は、妻の改嫁拒否という貞節に対して、家への孝の実践で応えるのである。此の如く、妻の貞節は、単に夫婦という一对の男女間における愛の厳しさと一観点からのみでは解釈しきれない複雑さをも具えることになるのである。なお、許升妻の貞節は、夫の社会的活動を支援して家への孝の実践をせしめる妻の母性と同値である。貞節は、儒教社会における夫を支えて孝の実践をせしめる妻の母性の範疇にあるのである。④「周郁妻」の場合、妻としての母性の威力実践への自覚が希薄で、夫の不行跡を譴責は正し得ず孝の実践にも導き得ぬ。夫が驕淫軽躁であるのは、実際には、親自身にも問題があるのである。多くは夫自身の精神的な問題も存するに相違なからうが、儒教社会においては、男性の人間確立は女性の支援に委ねられ、女性による男性奉仕たる母性発揮の有無が重視されるから、家庭の問題としては、妻の責任を問うに急ぐ。夫の責任を追求する傾向は看過され易い。かくして、周郁妻の失敗は、かの女における母性の欠落によるものであり、夫を自覚せしめる妻の貞節発揮が十分になさ

れぬ結果と認定されざるを得ないことになるのである。

貞節は、一つには、夫の死後すらも滅却されることはない精神的自覚として、寡婦貫徹や再婚拒否の決意を内に持つことでその威力が確定するが、現実的直接的には、貞節は、勿論夫以外の男性への性の拒絶、すなわち貞操堅持によって表明証明される。

劉向「列女伝」では、「楚平伯嬴」や「楚白貞姫」（貞順）また「魯秋潔婦」（節義）が、女性の貞操を語る。また「阿谷処女」も、貞操觀念を念頭において女性の身の処し方を示す。「統列女伝」の「陳国弁女」も女性の貞操堅持の事例である。なお、「宋恭伯姫」・「楚昭貞妻」（貞順）は貞節の証のために死に、「齊孝孟姫」（貞順）は死には到らないまでも、貞節の証のために首を括る。「後漢書」列女伝では、無法な暴力による貞操蹂躪に対して、身を殺して拒否する事例が見える。迫る盗賊に対して刎死する⑥「桑羊子妻」、脅迫する盗賊を拒絶して殺される⑦「許升妻」、權勢を笠に着て貞操を犯そうとする董卓を、罵って撲殺される⑧「皇甫規妻」、『御覽』四四〇引陳仲妻（後漢）は賊に犯されることを恐れて自殺するが、死に得ず、後に助けられる。また『華陽国志』にはこのような例が更に多い。すなわち、蜀郡の朱叔賢妻・姚超の二人の娘姚妣と姚饒、巴郡の馬妙祈妻・趙曼君妻・王元憤妻・趙瓚妻とその娘・趙万妻（耿秉妾・鮮尼母）等、概ね賊の暴力を拒絶して自殺する。また趙嵩妻（漢中郡）は、米賊に対して貞操を堅持する。時代下って魏晉では、時代の厳しい荒波を受けて、人々の生存立脚基盤を守護顯示する主体的意欲は殊更に強烈で、儒教の家族制は一層重視されている。家の母性への期待は時代状況に応じて多様で強烈である。「晋書」列女伝にも、貞操を堅持する女性の伝記は多い。番属の辱めを拒絶して殺される愍懷太子妃、迫る番晞を罵って殺害される賈渾妻、夫を殺害した劉曜が妻にしよとするのを拒絶して自殺する梁緯妻、夫を殺害した李驥が妻にしよとするのを拒絶して殺される許延妻、父を敗った賊将が妻にしよとするのを拒絶して殺害される尹虞の二人の娘、父母を害し己を辱めた蛮賊を殺そうとして果たさず自殺する王広女、父を殺し娘を妾にせんとする劉曜に泣いて死を請う

斬康女、賊將の辱めを拒絶して殺される苻登妻、夫を敗った呂超の脅迫に抗して自殺する呂纂妻、同じく呂紹妻も呂隆の辱めを拒否して高樓から身を投げて自殺する。『御覽』四四一引皇甫謐『列女伝』陳慄妻・陳南妻等も貞操堅持して自殺する。

また、貞節の証としての再婚拒否を固守して拒絶激しく、己の体を傷つけるものに、劉向『列女伝』の「梁寡高行」が有り、『後漢書』列女伝にも、⑫「劉長卿妻」が有る。『華陽国志』には、蜀郡の公乘会妻・楊鳳珪妻、広漢郡の廖伯妻・便敬妻・馮季宰妻・王輔妻、犍為郡の相登妻等有る。この傷身は、再婚拒否を表明する常套の手段にされているという感じもする。女性を性物として扱う男性の横暴に対する、女性の抵抗と観ることができないわけではないが、この行為が貞節の価値を高からしめる点に注目するなら、むしろ逆に、ここには、儒教社会の建設に身を以て殉ずる女性の姿が有るとする方が当たっている。『御覽』四四〇引の孫奇妻（三国呉）は結婚後一年で夫が死に子が無い。実家では連れ戻して改嫁させようとするが、鼻を切って容貌を損ない拒絶する。傷身で己の意志が通らない場合は、身を殺してしまふことになる。自殺するケースとしては、劉向『列女伝』貞順篇の「息君夫人」が有り、『後漢書』列女伝では⑬「陰瑜妻」が有る。『華陽国志』にはこの事例は多い。蜀郡の便敬妻・趙憲妻、広漢郡の袁稚妻・王上妻、尹仲讓妻、梓潼郡の虞頭妻等、いずれも夫死して子無く再婚を迫られて自殺している。自殺するが未遂に終わるものに、広漢郡の楊文妻、犍為郡の周紀妻・張惟妻等有る。『御覽』四四一引皇甫謐『列女伝』留子直妻も求婚を拒否して耳を切る。

なお、死んだ夫への激烈なる貞節の証として、殉死が有る。劉向『列女伝』貞順篇の「斉杞梁妻」は、夫が戦死して生きる意義がないことを知り夫への貞節を守って自殺する。「節義」篇の「楚昭越姬」は昭王に殉死する。『後漢書』列女伝ではこの事例が見えないが、『華陽国志』には、犍為郡の儀成妻は、子無く、毒薬を飲んで夫と共に葬られる。漢中郡の趙子賤妻も夫の後を追って自殺する。『晋書』列女伝には、張天錫妾閻氏薛氏に殉死の例が見え、苻堅妾張

氏は、苻堅が戦いに敗れて自殺する。

寡婦貫徹や再婚拒絶に至る覚悟を伴った貞節という自己犠牲は、以上のように、先ず、直接には、夫以外の男性への性の拒絶として提示され、死という自己犠牲を辞さない激烈な決意を中核とするものと認定される。そして母なるものを守護する母性の自覚を固持し、夫に己を従属させるこの必死の迫力の伴ったこの母性の覚悟が、夫に、母なるものへの孝の実践の精神を養成し教導するのである。また、妻の貞節は、表面は夫への忠誠というかたちをとるが、前述の如く、実は夫に、直接妻へではなく、家への忠誠を求めるものである。両者の愛の誠は、家、また観念的には祖霊の要請を介在して対応しているのである。また、更にいえば、母なるものたる祖霊の威力を現実的に施行するのは妻であるから、結局のところは、現実的な要請主体たる妻が、己が威力の中心となる母性基盤の存立のために、夫を奉仕せしめる母性發揮を本質とするのが貞節なのである。そこで、次に、もう一つの目標を含む寡婦貫徹や再婚拒否の事例を考察する。

(v) 夫の死後、家を維持する寡婦貫徹とそのための再婚拒絶

さて、以上の如く、寡婦貫徹や再婚拒絶は、一つには、強烈なる貞節の精神の証として、夫の死後にも遵守されるべきものと認識される。しかし、夫の死後にも継続されるのは、単に夫への愛の忠誠の証の実践という意義のみではない。貞操を死守する貞節そのものがすでに、家のためという目標に繋がれていたように、寡婦貫徹や再婚拒絶そのものにも、生前の夫への貞節の誠を証するという観念的意義のみでなく、儒教社会家族制に貢献する実質的な意義も期待されているのである。特に、再婚拒否でも死することなく、寡婦を貫徹する事例にはこの要素が濃厚である。例えば、『御覽』四四〇引の曹文叔妻（魏）は、夫が早く死に、子が無い。かの女は断髪して再婚の意志が無いことを表明する。その後、その家で嫁に遣らうとしたら両耳を切って曹爽を頼った。曹爽が殺され、実家の父が上書して

曹氏と絶婚して、改嫁させようとしたら鼻を切り、没落した曹氏を棄てるわけにはいかないと述べ、司馬懿もこれを許すのである。すなわち、夫の死後に、当然、貞節の精神を抛り所として堅持される寡婦貫徹や再婚拒否にも、やはり家のためという要請が強く生きており、夫の死後、主婦は、代替して夫の遺業を継承する一方、家を守護する存在として、家を断絶させないための諸事を配慮処置するという具体的義務も負わされているのである。妻が、血縁者に服従奉仕せしめる母性の権威を現実的に体現する存在であるとすれば、諸事への配慮は、負わされた義務というよりも、己が母性確立のための積極的行動という性格も持っていることも考慮しておく必要がある。『女誠』卑弱の項でも解説した如く、本来、結婚には、家の祭祀を夫婦で受け継ぎ、現実の家を維持運営して家族制を整えて、これを次の世代に引き渡していくという責務を確認する意味が込められている。この故に、夫が不在であったり、夫が早世したような場合、主婦には少なくとも、二つの大きな仕事が残される。その一つは、母なるものを守護確立する責任者として、家の祭祀を継続実施し、家を維持し、幼い子を慈愛保護して、社会に向かって家を確立し得る成人へと育成教導する任務である。例えば、『列女伝』母儀篇の「魯之母師」や貞順篇の「魯寡陶嬰」・「梁寡高行」などにおける寡婦の責任自覚に、この点は明確に示唆されているよう。なお、『御覽』四四一引杜預『女記』、淑という寡婦は、夫を失って兄弟から改嫁を迫られるが、貞女を列士の心根を持つ者とし、義のためには死ぬことも辞するものではないが、息子と娘がまだ幼いから生きていくこと。二子を成人させて、先祖以来の系統を存続し宗廟の祭祀を維持することが確立できれば夫のもとへ行きたいと思うと述べる。また四四〇引皇甫謐『列女伝』の、夏文生妻は、一女を生んで夫が死に、実家の父は再度改嫁を迫るが、一度目は、弁舌をもって相手を諦めさせ、二度目の相手には耳鼻を切り、死なないのは老いた姑が有り娘が幼いからだとして述べている。いま一つは、家を守護し祭祀を維持することと関連するが、家の権威として在る夫の両親たる舅姑を養い保護していくという任務である。例えば、同篇の「陳寡孝婦」では、出征する夫は生死分からぬ己の今後を語り、母への奉養を確かめて、妻の約束を得ている。かの女は、

貞節の証として寡婦を貫徹して親を奉養し家の祭祀を全うしている。ただし、養姑は、夫が生きている時にもなされていること、③「姜詩妻」に見える通りである。つまり、夫の死後も放棄されてはならぬのが養姑なのである。これは母なる家を維持し、母性を守護する妻の積極的行為なのである。

(イ) 遺子を育てるための寡婦貫徹や再婚拒絶

そこで以下、夫への貞節の一環として、その発展理念として実践される寡婦貫徹や再婚拒否が、付帯して家族制に對して果たす具体的意義を二つの面で検証しておく。この理念は、一は、子への慈愛保護を全うし、この子を、家を主体的に運営維持得る家父長あるいは社会人として成人せしめるという面で、先ずその直接的意義を發揮する。この際、寡婦の精神を支配しているのは、主体的積極的な母性自覚であるが、これは、恐らく、祭祀の存続を要請する祖靈の存在への観念的自覚に支えられているであろう。

子を成長させ家を維持するという役割を語るものとして、先ず、劉向『列女伝』母儀篇の「魯季敬姜」が有る。特に再婚拒否をいってはいないが、「穆伯、先に死し、敬姜、文伯を守護す」と紹介している。そして一篇は、寡婦としての敬姜が子を成長させ、且つ家の權威を維持したことを讃えている。また、寡婦と明示するわけではないが、「鄒孟軻母」にも、子を成長成人せしめる母の責務が語られる。他に、同篇の「魯之母師」における寡婦の自覚にも、おろそかに家を空けてはならぬ夫亡き後の妻の任務が語られる。貞順篇の「魯寡陶嬰」は、少くして寡となり。身一つで幼孤を養う。評判を聴いた者の再婚の求めに對しては、夫を忘れ得ぬと歌で表明して諦めさせる。同篇の「梁寡高行」も、若後家となったが姿美しく人格高潔の故に再婚希望者が多く、終には梁王が求婚する。彼女は、夫への貞節を誓った身であること、幼孤を守護せねばならないと表明しつつ、己の鼻を切り落として容貌を損なうことよって、王の求めを拒絶する。これに反して、孽嬖篇の「陳女夏姬」は、色情激しく寡婦を貫けず、家の祭祀も空しくし息子も破滅させる。儒教社会においては典型的な悪女とされる所以である。『後漢書』列女伝には、すでに指摘したよう

に、母と子の関係を語る資料が必ずしも多くはなく、この例は顕著ではない。ただ、⑫「劉長卿妻」は、五歳の子を残して夫が死んだ後、再婚拒否の姿勢を明確にして里帰りしない。十五歳で子が死に、再婚を免れ得ないと判断して耳を切り落として、己の意志を表明する。この場合、一応、遺子を養育する母の姿が認められる。しかし、『華陽国志』には、遺子または養子を成育させる寡婦の例は多い。蜀郡の公乘会妻、早く夫に死別し子も無い。周圜の者が再婚を迫るが断髪割耳して拒否し、夫の族子を養い姑に事えて生涯を終える。楊鳳珪妻、夫の死後、刀で咽を割いて再婚を拒み、遺子を育てる。便敬賓妻、子無く夫が死んで夫の族子を養ったが、父母に再婚を迫られて自殺する。殷仲孫妻は一家が疫病で死亡し、遺子を育てて家を成す。景奇妻も夫死して子無く、父は娘の若いのを憐れんで再婚をさせようとすが従わない。広漢郡の任安母、寡婦を貫き子を大儒に育て上げる。廖伯妻、再婚拒否して指を切断して寡婦を通して子を成長させる。王輔妻・便敬妻・馮季宰妻は、髪を切り耳を割く等して再婚を拒否し、遺子を養って義を全うする。犍為郡の相登妻、断髪して再婚拒否し、子を養う。周紀妻、騙されて再婚させられることに激して自殺するが助けられ、子を立派に成長させる。張惟妻、夫死して子無く兄の子を養子にし、舅姑に仕える。再婚を強要されて自殺を図るが一命をとり止める。前述の徐淑（秦嘉妻）も、兄弟に対して再婚拒否を表明し、二子を長育した述べる。『晋書』列女伝には、杜有道妻は一八歳で寡となり、後には傅玄と再婚するが、杜氏の二遺子を立派に成長し終わっている。虞潭母、夫に早く死別するが、子を訓育して出世させる。王凝之妻、夫等が孫恩の乱で死ぬが、自ら刀を執り、外孫を危機から救い、家を賊兵から守る。その後も寡婦を通して家を治める。以上、家を維持して遺子を養育して家の祭祀を断絶させない寡婦貫徹や再婚拒否の事例について掲げてみた。

(ロ) 家を維持し、養姑を遂行するための寡婦貫徹や再婚拒否

寡婦貫徹や再婚拒否が其自体が家族制に対して果たす具体的意義の二は、夫亡き後の家を維持し、親への養いを続けるということである。それは祭祀を継続するということでもある。ただし、すでに述べたように、養姑のことは、

夫の死後にのみ残される問題ではない。このことは宗廟祭祀に深い関わりを持っている。『左伝』襄公二年に、「婦、姑を養う者なり」とあり、養姑の事例は、先ず、前述の劉向『列女伝』の「陳寡孝婦」（貞順）の場合に明瞭である。出征する夫は、妻に後事を託して老母の養いを依頼する。これを固く約束した妻は、子の無いまま夫は戦死するが、改嫁せず姑を養い紡績に努めて家を維持する。実家の父母が再婚させようとしても身命掛けて頑として応じない。姑が寿を全うすると田宅を売って葬式をすませる。この他に、「陶荅子妻」（賢明）は、仕事上のことで夫を諫めて姑の機嫌を損ね実家に帰されるが、夫亡き後、帰ってきて姑を養う。同篇の「宋鮑女宗」は、夫が外に愛人を持つが、姑を大切に養って家を去らない。また、「魯秋潔婦」（節義）は、夫は五年間の留守をするのであるが、妻は、帰ってきた夫に、親への不孝を語るのだから、留守の間、養姑に勤めていたこと想像に難くない。『漢書』列女伝四一千定国伝には、東海孝婦の話が紹介されている。歳若くして寡婦となり子が無い。姑を養うこと甚だ謹んだ。姑がかの女を嫁にやろうとするが聞き入れない。姑は、嫁は自分に仕えて一生懸命、子も無く寡婦を通して哀れだ。久しく若いものに迷惑掛けてどうしようなど隣人に告げていたが、後に自殺する。姑の娘は、嫁が母を殺したと訴え、嫁は罪を否認するが信じられない。于定国は、十余年も姑を養ったこの女性が殺すはずがないと弁護するが、結局断罪される。この話は、『説苑』貴徳篇にも見え、『晋書』列女伝「陝婦人」は、これに酷似する。『後漢書』列女伝でも、⑥「梁羊子妻」は、夫の留守に養姑に勤め、姑を人質にして貞操を脅かす盗賊に対して、貞操を守り姑をも守るために己が首をはねる。家の守護のためには、貞操も姑も失われてはならないのである。『華陽国志』蜀郡列女には、公乘会妻は、夫の死後姑や兄弟が改嫁させようとするが、断髪割耳して拒否し、夫の族子を養い、終身、姑に仕える。また、梓郡列女、虞頭妻は、子無くして夫は死ぬが、このまま生きて姑を養い、死ねば夫の墓に葬られたいと意志表明している。『晋書』列女伝、「梁緯妻」は、貞操を奪おうとする劉曜に激しく抵抗し、死んで舅姑に仕えたいとも述べる。「孟昶妻」、夫は、義のために戦いを謀り、妻を離絶しようとするが、妻は、自分は家で姑を奉養する決意固く、実

家に帰る気持ちは無いと答え、健気に家を守護する。「陝婦人」、歳一九で寡婦を通して、叔姑に仕えること甚だ謹直で、嫁にやろうとしても断固拒絶した。

姑を養い守るために、主婦がなぜかくの如く敵しくかつ犠牲的に己を律しなければならぬのだろうか。儒教社会における養姑の問題については、「曹世叔妻」「姜詩妻」等を中心に解説もしているが、一つには、親への孝養であり、これは、夫の孝の実践を支援するという意味合いが濃い。それは、妻が夫の、母なるものへの孝の実践たる宗廟祭祀を主催するに際し、これを支えて助ける行為に匹敵する。いま一つは、主婦における宗廟祭祀と関連して、家の母性の権威としての姑を守護するということが有ろう。すでに述べたように、妻が夫をその母性で支えて導いて援助して親（母）への孝を実践せしめるように、祭祀においても、妻は、祖先（母なるもの）を祭る（事へる・奉養する）という夫の孝の実践を、支えて援助し実践せしめるのである。ただし、妻自身にも、姑を身を以て養い擁護する実践行為があることと祖先祭祀のことと関連付けて考察しておく必要もある。姑に仕えこれを養うというかたちを通しての妻の孝の実践には、夫の孝の実践を支援するという意味あいも無論有るが、直接には、次のような意味を含むであろう。すなわち、姑は、嘗ての母性維持施行者なのであり、家・血縁の母性を妻に伝達する仲介の立場に在る母性権威者であるから、養姑の主眼は、母性のシンボルたる宗廟の守りを伝達する家の現実的母性権威である姑を育み護持し、己（妻）に連なって現実的施行の意義が確立する母性を培い受け継ぐ行為そのものでもあったのだと考えられるのである。そしてこのことは、妻自身における祖先の祭祀への孝の実践という面においても同様に考えられる。すなわち、妻における祖先祭祀の実施は、家や血縁において母なるものであり母性のシンボルとしての意味あいを持つ宗廟に対して、これを護持し母性の根源を培いまたこれに精神的に一体化しこれを維持する行為として位置づけ得るであろう。

舅姑に仕えることについて、『毛詩』小雅の楚茨、「君婦」の鄭箋に、「凡そ適妻をば君婦と称す。舅姑に事ふるの称なり」とあり、『急就篇』にも、「婦とは、舅姑に服事するの称なり」と述べこれに言及するものは多い。『礼記』

内則には、「婦、舅姑に事へること父母に事へる如くす」「子婦の孝ある者敬ある者は、父母舅姑の命に逆うこと勿く怠ること勿かれ」「婦、將に事有らんとするに、大小必ず舅姑に請ふ」等、また、姑が家事を主婦に伝えることについて、「舅、没するときは、則ち姑老す。家婦、祭祀賓客する所、事毎に必ず姑に請ひ云々」という。『礼記』昏義や『儀礼』士昏礼等に見えるように、婚礼には、その翌日朝早くに沐浴して舅姑に見える。礼が終わって、舅姑は先に西階より降り、そして婦は主階たる東階より降る。将来、姑に代わって家の内諸事を施行する責任者となることを著す。三月にして廟見の礼が行われ、祖霊に告げて主婦としての資格が確定する。『礼記』曾子問に、「三月にして廟見し、来婦と称するなり。日を扱びて禰に祭るは、婦の義を成すなり」とある。『白虎通義』嫁娶に、「三月であるわけについて、「妻を娶りて、先に廟に告げざる者は、必ずしも安んじざるを示す。……婦入りて三月にして然る後祭に行す。舅姑既に歿すれば、亦た、婦入りて三月、廟に奠采す。三月は一時、物、成ること有り、人の善悪、知るを得可きなり。然る後、宗廟の礼に事ふるを得可きなり」と説いている。なお、『儀礼』士昏礼には、「若し舅姑既に没すれば、則ち婦入りて三月にして、乃ち奠菜す」とあり、舅姑が生存している時のきまりに言及していないので廟見・奠菜・祭禰の関係をどう理解すべきかについて経学者間に議論が有り、拙著『劉向「列女伝」の研究』頁四六〇にも概略紹介した。いずれにしろ、婚礼の翌朝、舅姑に見える儀式を通して、新婦がやがては姑に代わって家内の諸事をきりまわす責任者となることを示唆し、三ヶ月後に、廟見の儀式で正式に婦と認定されると受け止めておくべきであろう。

主婦と姑との関わりの深さは以上のような文献に指摘される通りであり、主婦の祖先祭祀における役割については、すでに、「曹世叔妻」やその『女誡』の解説を通して、特に（Ⅲ）の「卑弱」の（ロ）祖先祭祀における主婦の位置や（ハ）宗廟祭祀と孝について等に述べている。姑は、舅が健在で家の主婦としての責を背負っている時期において、祭祀を取り仕切って、母なるものを護持し母性の権威を確立する存在である。次の世代を受け継ぐ主婦が、姑を養い

守るのは、姑が、主婦と祖霊の權威を仲介する存在だからである。祖霊に認められ姑に受け入れられることにより、主婦は、母なるものを背景として現実の夫や子に対して、母性の權威をもって対応できることになるのである。

なお、妻と母における母性の性格について、類似する側面と異質な側面とを比較しつつ、さらに詳細に論述し、妻と夫の間に認められる母性の機能が、娘と父の間にも類似的に認められることについて総合的に論じ、また、儒教社会における賢才の妻の位置づけについても考察したが、ここには収まらない。これらは、他のかたちで公表する。

儒教社会与女性—《后汉书·列女传》之研究（II）

下 见 隆 雄

对范晔所著的《后汉书·列女传》，曾经有不少人感过兴趣，但是从女性史观点出发的历史思想史方面的考查，似乎还没有人尝试过。本文拟论《后汉书·列女传》各传，分析传记资料的性质，并在与刘向所著的《列女传》进行比较的同时，考查表现在各个列传中的女性观特质。对于女性特别是母性的存在意义的认识，在女性的社会意义上怎样与儒教思想有机地联系？同时又作出怎样的新的展开，还有它与东汉时代的历史现实如何对应，本文对这些问题也进行研究。刘向《列女传》是第一部通过女性形象谈论构筑儒教社会理论诸相的书，此书论及女性在儒教社会中的作用，这一点尤其值得注意。刘向认为：母亲的母性对于孩子社会性的形成起着重要的作用，而且这个母性发展性地倾注到丈夫身上，在支持丈夫的社会地位方面，也发挥着重要的作用。《后汉书·列女传》中，我们也可以看到大致相同的女性观。不过与前者比较起来，妻子倾注于丈夫的母性增加了，另外在后者，前者中位于孝之上并被强行要求的“忠”的成份大为稀释，实践于家庭的“孝”受到了特别的重视。东汉时代，豪门在各地独自发展，扩张自己的势利范围，同时另一方面，中央政府的专制集权相对减弱——《后汉书·列女传》的那种变化大概是这一历史社会状况的反映。